



だより

— つながれ ひろがれ —

編集 環境パートナーシップちば
 代表 加藤 賢三
 事務局 千葉市中央区中央港1-11-1
 (財)千葉県環境財団環境技術部
 環境啓発チーム
 電話 043-246-2180
 FAX 043-246-6969

年 頭 に あ た っ て

千葉県環境生活部長 米田 謙之輔

環境パートナーシップちばの会員の皆様には、日ごろから本県の環境行政に御協力いただき、さらには地域での環境学習や環境保全活動の推進に大変な御尽力をいただいておりますことに、心から感謝申し上げます。

さて、県では、すべての施策分野において環境の視点を組み入れ、多様な生物・生態系の保全と再生、環境産業の集積や循環型農業の推進など、多様な主体との協働・連携等により施策を展開しています。

例えば、循環型社会の確立に向けて、「バイオマス立県ちば推進方針」を策定し、全国有数の農林水産業や多様な先端技術の蓄積など、千葉県の持つ優位性を生かした農林排出物などの生物系資源の利活用に取り組んでいます。

また、県民総参加による環境再生を目指して、「ちば環境再生基金」を設置し、県民や企業の皆さんからの寄付を、地域で行う自然の保全・再生活動や廃棄物の不法投棄対策などに活用させていただいております。

さらに、県内で大きな環境問題となっている産業廃棄物の不法投棄についても、本県独自の「産廃条例」の制定や24時間体制でのパトロールなど、不法投棄の根絶に向け力を注いでいます。

一方、今日の環境問題は、身近なごみ問題から、地球温暖化のようなグローバルな問題まで、広範囲にわたっています。これらを解決して行くためには、県民1人ひとりのライフスタイルや事業活動のあり方を根本から見直し、社会のあり方そのものを持続可能なものに変えていく必要があります。そして、周りの人にその輪を広げていくこ

とがたいへん重要です。

今、環境学習や環境保全活動の分野では、環境問題に意識ある市民や環境活動団体の役割がますます大切になってきています。そのような中、環境パートナーシップちばの皆様には、県の環境学習アドバイザーや、エコマインド養成講座の講師として御協力いただいております。さらに、環境シンポジウム千葉会議やエコメッセちばでも、行政、企業等と協働し、環境保全活動に力を入れていただいております。

これからも、皆で知恵と力を合わせ、情報を交換し、活動を広げていくことにより、足もとの環境から地球環境へと環境保全活動の輪を広げていこうと考えておりますので、今後とも皆様の御協力をよろしく願います。

終わりになりますが、環境パートナーシップちばと皆様のますますの御発展・御健勝を祈念いたしまして、年頭のあいさつとさせていただきます。



里山フォーラム in ちば

里山シンポジウム実行委員会 千葉 智雄

里山の荒廃は環境の問題ばかりでなく、心の問題も含む社会問題を提示していますが、そのような中で「ちば里山センター」が昨年9月に設立さ

れました。多くの団体や市民とネットワークを組み里山再生に向かって活動を開始しています。

このたび、設立を記念する式典が1月23日に

市原市市民会館で開催されました。

テーマは「みんなの力で未来につなぐ、ちばの里山」で次のような内容でした。

- ・ 里山センターの紹介
- ・ 県民・企業による里山活動報告
- ・ 講演「里山と健康」森林療法中間報告
- ・ 対談とミニステージ
「加藤登紀子さん・堂本千葉県知事
里山を語り、歌う」

<あふれる参加者>

参加者は2,000人を越え座席の通路まで人で埋まる盛況ぶりです。ロビーにも会場へ入れなかった人があふれていました。堂本知事がこれは「加藤登紀子人気でしょうか、それとも里山への関心の高まりでしょうか」と会場に問いかけますと、「里山への関心の高まり」に大きな拍手がわきました。きっと相乗効果でしょう。

<いろいろな展示・即売>

ロビーや屋外には多くの団体や企業、林業・水産関係の機関がそれぞれのブースで展示や出品を行ない、即売会も行われ、押すな押すなの盛況です。当然、里山を中心とした出品で、千葉県の農産物・水産物などを大勢の人が熱心に見て周り、購入していました。

中には、大きな熊の木彫りの即売もありましたが、ノミは使わず、全てチェーンソーのみで作成した作品であると売り手のお嬢さんが自慢していました。



<フォーラムの内容>

フォーラムは、平均年齢68歳、最長老80歳の炭友会の活動報告、(株)リコーの環境を重視した取組の説明、木更津工業高等専門学校生徒による「農業用水路内における水生生物再生の試み」、高野総泉病院院長による「里山と健康」の話がありました。

特に、木更津高専の生徒による発表はコンクリート三面張りの水路における水生生物再生の試みで若い力がこもった、未来を感じさせる報告でした。

対談はさすが環境がライフワークの一つと自負されるお二人の話で、千葉の里山と環境を身近に感じさせる良い話でした。堂本知事が話された残土問題の取組や加藤登紀子さんの「南房総のすばらしさは将来の日本の姿である」という話など、参加者一同が聞き入っていました。

最後に、加藤登紀子さんの心に響く歌を聴きながら成功裏に式典は終了しました。

花見川から印旛沼までのエコウォーキング ～花見川から新川を歩いてみませんか～

桑波田 和子

季節外れの台風の影響で、朝まで雨が降り急激にお天気が回復した昨年12月5日(日)、花見川の花島橋から新川の宮内橋まで、エコウォーキングを開催しました。

これは環パが16年度事業の柱である「印旛沼をきれいにする活動」の中の一環として、印旛沼環境基金の助成金をいただいて実行したものです。

活動の目的は、流域に多くの人が足を運ぶことで、印旛沼に関心の無い人もある人も、印旛沼をきれいにする活動に展開して欲しいことです。

当日は、お天気のこともありキャンセルも出ましたが、17名でスタートしました。花島公園を抜け花島観音を参拝し、花島橋からサイクリングロードを歩きました。川べりを歩いていると辺りに人家が見えずにまるで渓谷に来ているような錯



覚を覚えますが、川の水は残念ながら汚れていると実感します。それでもカルガモやバン、カワウ、ダイサギなどが泳いでいました。花見川は千葉県でも冬鳥の数・種類が多いことで有名でしたが、

最近はかなり少なくなっているようです。このことは他の場所でも同じようで、鳥の方が人間よりも早く環境の変化をつかんでいるのでしょう。冬とは思えない気温と、空にはまるで夏空を思わせる真っ白な雲が浮かぶ中、汗をかきながら歩きました。横戸弁財天で一休みし、花見川開拓のことなどに思いをはせました。花見川から新川へは一度川縁を離れ、迂回して大和田排水機場から新川縁を歩きます。

お昼休憩もかねて大和田排水機場を見学させていただきました。水資源機構の方から新川と花見川は分水嶺の為、新川の水をポンプアップして花見川に排水していること。印旛沼の滞留した水を流動化するため、千葉県への委託を受け花見川へ排水していること等、排水機場の役割をお聞きし、参加者の質問にも答えてくださいました。

お弁当を食べながら、参加者の自己紹介など話しました。参加者は健康のためにウォーキングを良くされている方、花輪川に取り組んでいる NPO 法人千代オikosと環パの会員でした。意見の中には、「花見川の四季の景観の良さに加え今回参加して水にも関心がわきました」、「大和田排水機場を見学したことで、印旛沼の水を花見川から東京湾に流すだけでなく、印旛沼に流れる流域をきれいにする必要を感じる」、「水辺に近づける親

水の間があればもっと水に関心がわくのでは」などがありました。

午後からは、新川から宮内橋まで川縁を歩き、八千代市の文化伝承館に行きました。新川の近くにはマンション建設中など開発が目の前まで迫っています。市民球場の先には、県立公園広域構想があるそうです。文化伝承館からの眺めは、新川を中心に田んぼ、斜面林と広がっています。開発も目前ですが、人にも自然にもやさしい開発を願います。

今後の環パの活動として、花見川の河口から印旛沼までエコウォーキングして、「ウォーキングマップ」、「印旛沼流域カルタ」など作成したいとお話したら、「参加したい」と嬉しいお返事をいただきました。

今回の活動を通して、景観が良くなることはエコツーリズム、地域活性、街づくりに発展し里山保全にもつながります。印旛沼を考えるにはもっと多くの方が水辺や里山に触れて体験することで「印旛沼をきれいにしよう」の運動が広がっていくのではないのでしょうか。そのためにはエコウォーキングは大切な活動と思いました。

なお、この活動は平成17年1月26日(水)「印旛沼環境基金報告会」で報告いたしました。

第2回印旛沼再生行動大会開催 ～恵みの沼を再び～

去る1月20日、第2回印旛沼再生大会が佐倉市音楽ホールに知事を迎え、主催地、佐倉綿貫市長の現状克服への決意の挨拶をもってはじまりました。

この会には印旛沼流域十五市町村からの代表(市長を含む)が参加し、ようやく印旛沼の自然再生、水質浄化には流域全体で取り組む必要が当然とはいえ行政側に認識がされてきていることを示しました。

また、第二部では、昨11月10日に実施された、市民、NPO意見交換会の内容発表が行われ、ついで印旛沼流域自然環境トークセッションが続きました。長年印旛沼自然の制御のために努力されてきた専門家や現場を大切にしてきた研究者と市民、NPOが同じテーブルを囲んだことが功を奏し短い時間の中でしたが内容ある問題提起となりました。当日の会では、環境パートナ-

シップちばの役員、会員の活躍が大きく、分科会報告、司会、トークなどに努め、市民側のネットワークの役割が大きいことを示すものとなりました。

同行した参加者の意見を追記します。

第三回には、各市町村が印旛沼再生のために、何が出来て何が出来ていないかの率直な関陳と、専門家による本質的な問題を市民の側に提起することが求められます。いわゆる近代化のもたらした当日知事が言われた生物多様性や文化景観の喪失、全国ワーストワンの水道源水の問題など、とんでもない事態への腰をすえた実行が県、市町村、研究者そして市民団体、市民一人一人に求められています。掛け声やセレモニーの段階ではないのではないかと。

(文責 広報部)

印旛沼再生に思う

山崎輝清（四街道メダカの会）

マスコミ報道でご存知のように、印旛沼の水質は今や飲用水源として全国ワースト1（平成14年COD9.1mg/L、平成15年COD8.6mg/L）です。このことは飲用水としてだけでなく自然環境全体においても大問題です。

私が住んでいる四街道市は印旛沼に直接接してはいませんが、鹿島川流域、新川流域としてその自然環境は、全て印旛沼と深い関わりがあります。「地球は水の惑星」です。自然環境について考える場合、常に水辺問題が基礎であると思っております。いのちー自然と水は切っても切れない関係にあるのです。

標題のテーマに関し昨年11月10日に市民・NPO意見交換会が開かれ、本年1月20日にも第2回目として再生行動大会が開催され参加しました。千葉県が「印旛沼の再生」に取り組もうと印旛沼流域水循環健全化「緊急行動計画」（2010年目標）を立ち上げ、行政（県、市町村）と市民、団体が協働して長期的（約30年後）目標を定め「みためし（試行錯誤）計画」の方式により取り組もうとしているのです。このような大きな問題に行政と市民が協働で対処することは、全国初のことと認識され注目されています。この交換会で感じたことと提言（私見）を述べさせていただきます。

千葉県は全国最悪との汚名を解消すべく、堂本知事が2回目の大会に挨拶するなど、担当者の熱意が強く感じ取れました。この協働型みためし計画は、印旛沼流域（船橋市・鎌ヶ谷市・白井市～八街市・富里市15市町村、流域人口約73万人）全域が連動し取り組むことが必須です。ところが実行の現場である市町村の認識は低く、特に最も汚染にかかわっている遠隔地の最上流部（四街道市もその一つ）においては関心がなく、計画書の対策内容はかなり低いものと感じました。各市町村の市民もこのような計画の具体性を全くといってよいくらい知らないと思われ（先日まで私自身がそうでした）。

この沼はかつて印旛（沼）文化と言われる風土に育まれ、自然と、時には闘いながらも、なじみ合った豊かな自然環境と共生していました。それが、1960年代から急成長した経済活動により、全国的に自然環境はないがしろにされてしまったのです。この反省に立ち、ようやく近年、人間の生存のためにも自然環境の大切さが認識され始めています。

かつて豊かな生態系を誇っていた印旛沼も排水に汚染され、アオコが大発生し、今や外来魚類や帰化植物が侵入し、今まで生態系を保っていた在来種が激減し生物多様性が失われてしまいま

した。沼はヘドロ化し、現場を見ると、とても飲める水とは思えません。飲料用には浄化処理されているとは云え、基準外の物質が含まれていることは否定できません。対策としては汚染しないこと、流域の河川・水路を含め土地全体での自然浄化力を高め活用することにつきます。その対策の概要はすでに下記の計画書に示されていますが、これを実施に移すには行政と市民との協働がなければ実現できません。

「恵みの印旛沼を再び」の緊急行動計画書についてのホームページ：

http://www.pref.chiba.jp/syozoku/i_kasen/inbanuma/03keikaku/03keikaku_01.html

以降はこの計画が実現できるための実施面のポイントを提言（私見）として述べたいと思いません（四街道めだか新聞投稿中）。

（1）行政間の相互連携の実現

（第1ポイント）

対策のほとんどが市町村にあるにもかかわらず、流域市町村の対策内容がまちまちで具体策が不十分（欠如）。県がもっと指導性を発揮し、市町村が実際に動く必要がある。行政間の相互連携の実現が必要。従来からやっていることの列挙ではなく、再生（自然環境回復）のために新しくやらなければならないことへの認識不足。最大のポイント。

（2）市民団体と行政の協同

（第2ポイント）

NPO法人など市民団体との協同を以下に進めるかが前項と同様に大きなポイント。具体的な実施計画の時点から協同する必要がある。この計画の特徴である「みためし」の実行をあげるためには、モニタリング、計画の見直し、実践の全過程にわたり、全てに市民と協同して行う。そして全ての事例で行政サイドだけでは決して行わないこと。現場の知識は住民の方が良く分っていることが多く、協同で行った方が現状に即していると思われる。そのためには常に情報公開（交換）が必要。協力市民団体の連携体制づくりも重要。

（3）一般市民にこの計画をアピール

（第3ポイント）

水がいかに人の生活や環境問題に大切な、自然の水の重要性（水の惑星）をアピール。個人、自治会、市単位で印旛沼の水をきれいにする意識付けを徹底する。生活雑排水等について及ぼす影響と具体的改善策（合併浄化槽の設置、生活雑排水への配慮、路上での洗剤による洗車を避けるな

ど)を提示。

(4) 自然浄化力活用 [植生浄化、土壌浄化]

自然水を涵養するために必要なことを推進する。森林・斜面林の保護と育成。里山の回復。休耕田の活用。地表面の非舗装化(浸透性)。調整池などの池には水を常時保水し、水草を入れて自然浄化力を高める。河川・水路の多自然化。自然型農業の推進(減農薬など)。

(5) 生物多様性の沼と河川

ヘドロの浚渫と自然浄化能力の向上(水位に周期的変動をつけ砂地の確保、水草養成)。少しずつでも継続的、長期的に浚渫し自然浄化を促し、生物多様性を目指す。長い目(30年後)で見る。

(6) 水質調査と生物調査(再生指標)の連携と取り組み

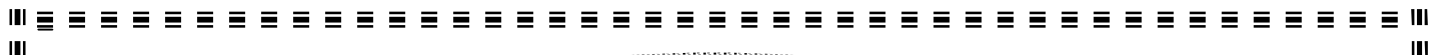
水質測定(方法なるべく統一)と再生指標のた

めの生物調査(魚介類、水草を中心)を全域でまとめる。

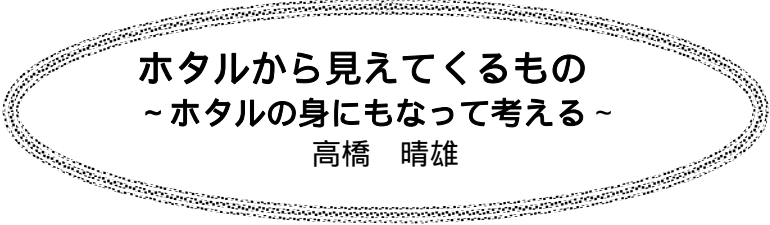
(7) 印旛沼資料館(水辺センター)

水辺の大切さを訴える資料館を設置し、印旛沼流域の歴史も保存すると共に、この活動を通して新しい印旛沼文化(水辺文化)を生み出す拠点とする。

千葉県は周囲を水に囲まれた水辺の豊富な島です。私はその水際外周すべてと、いくつかの河川の水辺を巡って見ながら、水辺の大切さを肌で感じ取りました。海・川・里山・森・山などの自然が、水辺文化の視点で結びついて欲しいと願っています。



ホタルはめっきり少なくなりました。そのわけをホタル生息地を守ることで苦労されている八千代オikos代表が語りま



ホタルから見えてくるもの

~ホタルの身にもなって考える~

高橋 晴雄

真剣に懸念してほしいのです。八千代や四街道でホタルを保全しておられる方々はたいへん貴重です。ホタルの身になって

した。去る十月八日、主催は四街道をキレイにする連絡会(代表中村稔)で、演者は環境パートナーシップちばの代表でもある加藤さんです。私は四街道“きれいにする会側の聴手の一人でした。とてもいい内容でした。

いろいろやったださる皆さん本当にありがとう。というわけで改めて考えさせられた企画でした。

私はホタルに成り代って聴くことにしました。いまや私たちホタルは日本では氣息炎々の身です。良くぞ加藤さん言ってくれました。

ここ四街道では、自然同好会代表の市川清忠代さんらを中心に市民参加で、ホタルマップを毎年作り、生息数や生息地の変化を追い、ホタル生息地を守り続けてきました。田んぼの荒廃(休耕田)産廃、ゴミの堆積等による影響で減少したのではないかと心を痛めながら、決して諦めることなく活動は連綿と続いてきました。八千代では、ホタルを見る会、ホタルマップの作成、ホタル生息地調査報告書作成、ホタルやメダカの自生地を目指す花輪川プロジェクト、さらには休耕田活用による、メダカ、ホタルの保全などが行われてきたといいます。四街道でも同じことが行われており、参加者はほとんど共感を持って聞くことが出来ました。

第一に清流が一番の私たちホタルにとって水がひどすぎます。生活排水や農薬を含む水、人工的に温まった水温じゃとてもじゃないが住めないし、生きる事も出来ない。

また、当日、八千代市の職員も参加し、ホタルマップ、ゴミマップを受けて市がどのような改善活動をしているかを披瀝したことが四街道の参加者には新鮮に移りました。

第二に、まちの照明が明るすぎてピカピカ求愛のサインを出すことが出来なくなりました。これじゃあ子孫をふやせません。

市民と行政の協働の両市の差を見せ付けられたという参加者の感想が多く寄せられたのもこの会の特徴でした。

第三には、大好きな田んぼが、農地改良の名のもとで全く変わってしまいました。冬はカラカラになり、傾斜地を背にした台地も開発され、これまで出ていた湧き水も浸み出し水も濁れてしまいました。

現在各地で、絶滅の危機からホタルを救うことを大義に、ホタルを養殖し、夏の祭りの呼び込み

わずかに残ったところで我々は細々と生きている始末。私たちホタルを省みないと人間社会は大変になりますよ。同じ原因でカエルやトンボも少なくなりました。当然小鳥も来なくなる。とどのつまりは人間にも・・・。皆さんにホタルの絶滅を

に使うところが各地に出ています。しかし、これまで両市で「ホタル」を追ってきた人たちの「心」は、ホタルの養殖ではなく、ホタルが棲める環境をどう身近につくり守るかということでした。加藤さんの講演はその思いに満ちていました。

古来、心のよりどころとしての故郷は、セミヤホタルと結びついてきました。これを失うことは、心のよりどころの喪失の一因にもつながりはしないか。そういえば私の大学受

験時、蛍雪時代という雑誌がありました。ホタルの光で書を読み、雪明りで勉強したという故事から蛍雪は苦学のたとえでした。そんな意味は既に今の子どもには理解困難。

しかし、ホタルを見て子どもは素直に喜び、大人はその様子に感動するのは今も昔も全く同じ。ホタルの身になって行動することは実は子どもの身になって行動することにつながり、印旛沼の浄化にもつながっていくのではないか。

第20回エコサロン報告

WES ネット「事始め」、鎮守の森・環境・福祉ネットワーク ～方法としての「神社・仏閣」「自然環境」

今回のエコサロンは、「鎮守の森」を多目的に活用することで、地域おこし、森林と癒し、コンサートなど気が付かなかった面から、環境と福祉の接点を見つけてみませんか、という呼びかけで、平成17年1月28日(金)午後6時から千葉大学総合校舎(西千葉)E棟4階 413号ワークショップ室で、石井秀樹氏(東京大学新領域創成科学研究科 修士2年生)をお招きして、千葉大学 福祉環境交流センターとの共催で行われました。石井さんにお話を伺うきっかけは、千葉大学の広井良典氏らのレポート(月刊福祉12月号)「『鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク』の構想」広井良典(千葉大学教授)・石井秀樹(東京大学大学院)です。

このネットワークは、広井良典氏を中心とした学際的な研究会「『老人と子ども』統合ケア」(1998～99)、「自然との関わりを通じたケア」(1999～2000)の問題意識が深化して発足した研究会(2003～)がベースになっています。この研究会で石井さんは事例収集やフィールド調査、分析などを担当しました。今後、千葉大学を拠点に医療福祉分野、環境分野の垣根を越えて様々な人が対話し、連携する場を目指して、現在準備中だそうです。

そのネットワークの問題意識は、「疾病構造の変化、高齢化する日本社会の現状は、従来の『治療』に重きを置いてきた医療のあり方の問い直しを迫ります。予防医学や、包括的な生活支援を、生活圏である地域の中に、今後どのように確立し、展開するのか...? 特に、現代社会における様々なストレスや、自然からの隔離、伝統的なものからの切断、身体性の希薄化といった状況を考えれば、コミュニティや自然との関わり、スピリチュアリ

ティといった観点から、その意味を問い直し、社会的な共通資本としての『緑地・自然環境』『神社・仏閣』を資源として再発見して、福祉やケアの諸場面で展開することが大きな課題なるでしょう。」だそうです。

「鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク」は、別名「WES ネット」。従来は、分断されて論じられてきた三領域「W:Welfare(福祉)、E:Environment(環境) S: Spirituality(スピリチュアリティ)」の頭文字を合体させたものです。

今回のエコサロンでは、スライドショーを用いながら、研究事例の紹介がされました。以下、当日紹介された事例です。

- ・法然院/京都市左京区 ～資料配布
- ・石像寺(くぎ抜き地蔵)/京都市上京区
- ・小野照崎神社(下谷坂本富士)/東京都台東区
- ・見沼田んぼ /埼玉県さいたま市・川口市

「これらの魅力的な空間の事例では、そこを訪れる人々が、遊びや営みを通じて場や人と関わりあえる工夫が多くなされており、これらは高齢者福祉の分野で、お年寄りの『役割』を創出させて、生きがいや張り合いを作ることを目指した実践に通じる。」といった事が議論されました。

時間がなく、十分にお話をお聞きすることができませんでしたが、さいたま市出身の石井さんは、「見沼田んぼ」に拠点を置いて活動されています。

見沼田んぼ福祉農園の農園ボランティア「見沼・風の学校」のスタッフとして環境福祉を学ぶと共に、福祉農園の研究活動とも連携した機関紙「見沼学・みぬまなび」の創刊にも関わっています。

「千葉でたくさんの方の経験と勉強させて頂きたいと思っております。WES ネットの立ち上げに当たって、皆様の忌憚なきご意見とご協力のほどよろしくお願い致します」と石井さん。皆さんも、一緒に活動して行きませんか。

(文責 広報部)



石像寺(くぎ抜き地蔵)

総務部より 運営委員会

12月の運営委員会(12/24)

報告

- ・「アダプト制度導入に関する調査報告書」～印旛沼をきれいにするために～が完成し、79市町村に配布しました。アダプト制度に関するアンケートを市町村に依頼し、回答率100パーセントの協力をいただいた。調査の結果、アダプト制度を実施している市町村は12ありその中に、印旛沼流域は5市町村であった。
- ・11/10 「印旛沼に係わる市民・NPO意見交換会」開催
NPO 委員として環パ代表の加藤氏は、景観、親水分科会を担当した。
- ・12/5 「花見川から新川を歩いてみませんか」開催

参加者：17名(市民、NPO法人オイコス、など)。大和田排水機場など見学した。

- ・12/21 「千葉県環境学習基本方針の見直しに伴う意見交換会」が県庁で開催。
- ・「千葉県地球温暖化防止活動推進センター」の運営委員に環パとして、加藤氏が就任。

協議

- ・「アダプト制度導入に関する調査報告書」を1部500円(郵送料は環パ負担)で販売する。
- ・「だより41号」について
- ・「印旛沼をきれいにする活動」の総括と17年度の展望にむけて「印旛沼流域シンポジウム」を開催する。

1月の運営委員会(1/28)

報告

- ・1/28 エコサロン開催
テーマ：WES ネット「事始め」鎮守の森・環境・福祉ネットワーク
～方法としての「神社、仏閣」「自然環境」
講師：石井 秀樹氏(東京大学大学院生)
日時：1月28日(金) PM6:00から7:30
会場：千葉大学総合校舎 E 棟
- ・1/20 「印旛沼再生行動大会」開催
環パとして、パネル展示に参加。11/10「印旛沼に係わる市民・NPO意見交換会」の分科会(景観・親水)を加藤氏が報告した。
- ・1/23 「里山フォーラム in ちば」市原市で開催され約2,000人の参加者があり成功裏に終わった。
- ・1/26 「印旛沼環境基金報告会」志津コミュニティセンターで開催。
環パは、助成金対象の「花見川から印旛沼でのエコウォーキング」12/5開催の活動報告をした。
- ・会計より
「だより」41号発送に、15・16年度会費未納の方に振込用紙を同封する。
- ・審議会より
「千の葉プロジェクト」について協議
- ・「印旛沼流域フォーラム」について
テーマ：「印旛沼をきれいにする活動」
日時：2月20日(日) 13:30～16:30
会場：佐倉市志津コミュニティセンター 会議室(2F)

お知らせコーナー

県とNPOとの意見交換会の参加者募集

県では、NPOとのより良いパートナーシップを築くため定期的に意見交換会を行い、県とNPOとの協働事業を推進しています。
 意見交換会のテーマ；
 □環境、□まちづくり、□その他（福祉、子ども、教育、文化を除く）
 開催日：平成17年3月1日（火）
 午後1時～4時30分
 開催場所：千葉市民会館（千葉市中央区要町1-1、TEL：043-224-2431）
 分科会：テーマに基づき1月末までに提出された意見等を参考に設定します。
 申し込み：千葉県環境生活部NPO活動推進課
 NPO事業室（成岡・山下）
 TEL 043-223-4165・4166
 FAX 043-221-5858
 e-mail：npo-zigyoun@mz.pref.chiba.jp

「印旛沼流域フォーラム」

主催：環境パートナーシップちば
 テーマ：“なぜ今 印旛沼なの”
 ～印旛沼をきれいにする活動～
 趣旨：印旛沼をきれいにすることは、千葉県民の大きな目標の一つです。印旛沼浄化に向けて流域で取り組まれている市民、事業者、専門家、行政の方々の活動をお聞きし、どうすればより協働がよいできるか、意見交換会をしましょう。そして活動の輪がいつそう広がるように、皆様のご参加をお願いします。
 日時：2月20日（日）午後1：30～4：30
 会場：佐倉市志津コミュニティセンター会議室
 講演：小倉 久子氏（千葉県環境研究センター）
 内容：事例発表
 意見交換 等
参加は何方でも歓迎！！

「アダプト制度導入に関する調査報告書」

1部500円（送料環バ負担！）でおわけします。
 ご希望の方は、下記までご連絡ください。
 申込先：千葉県環境財団 環境技術部
 環境啓発チーム気付

国連大学ゼロエミッションフォーラム in 千葉

主に事業者の方を対象に、なぜ今、先進的企業が環境経営への転換を急ぐのか、その背景などに関する事例を紹介します。
 日時：2月22日（火） 13時～17時
 会場：ホテルポートプラザちば（JR京葉線または千葉敏モノレール千葉みなと駅前）
 申し込み方法：「ゼロエミッションフォーラム申し込み」と明記し、企業の名称・住所・郵便番号・所属、参加者氏名・電話番号を書いて、はがき、ファックスまたはEメールで申し込みください
 締め切り：2月16日（水）必着
 お問い合わせ：（財）千葉県環境財団 TEL：043-246-2180 FAX：043-246-6969
 E-mail keihatu@ckz.jp

広報部より

1. 様の活動やお知らせなどの原稿をお寄せください。
2. ホームページに団体のリンクや連絡先としてメールアドレス等の記載をご希望の方はご連絡ください。

HP：www.geocities.co.jp/NatureLand/4632/

古紙 100%再生紙使用

「環境パートナーシップちば」は、環境活動の推進と充実を目指し、千葉県内の環境市民のゆるやかな連帯のもと、相互の情報交換と交流を深め、行政および専門家とのパートナーシップによる活動の展開を図ることを目的としたネットワークです。

申込先：千葉県環境財団 環境技術部
 環境啓発チーム気付

TEL:043-246-2180 FAX:043-246-6969

会費納入先：環境パートナーシップちば

郵便振替口座 00160-9-401872

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~kanpachi/>

千葉県環境財団環境技術部環境啓発チーム気付

<環境パートナーシップちば>

入会申込書

会の趣旨に賛同し（個人、団体、賛助会員として）
 会費を添えて入会します

氏名		入会年月日	
住所	〒		
TEL		FAX	
年会費	個人1,000円 団体2,000円 賛助会員5,000円		

